令和５年度　　園評価書

園番号　35　園名　入山こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かに たくましく 自分の思いを 出せる子	なんだろう おもしろそう やってみよう	いろいろな事に「なんだろう」「おもしろそう」と興味や関心をもち、「やってみよう」と試したり工夫しながら遊びを楽しんでいる	近隣の園・小学校との交流の機会を通し、子ども達が経験したことを遊びに取り入れられるよう環境を用意したことで、「おもしろい」「もっとやりたい」と同じ遊びが繰り返されるようになった。遊びの中で、保育者がモデルになり、時には引いたり、加減したりしながら、子ども達だけで楽しむ姿を見守った	B	A	・“主体性をつけたい”という理由や根拠としてあるのが「やってみたい」「なんでだろう」「どうなっているのだろう」という心の動き、感動体験や活動体験を重視したいという体験そのものが、大人になってから生きてくる	各クラスの子どもの興味関心を保育者間で共有し、好きな遊びややってみたいがすぐに叶えられる環境を用意をする。さらに遊びの様子を見て出したり引いたりのタイミングを考えた再構成を行う
		自分らしい表現で気持ちを伝え、思いが通じ合う喜びや、人とかかわる事の心地よさを味わっている	子どもの思いや言葉に共感し反復しながら、さらに言葉を引き出す関わりをしたことで、子ども自身が自分に自信を持ち、いろいろなことを楽しむ姿につながった。その姿を捉え、友達同士での関りも楽しめるよう、保育者が仲立ちを行い、人とかかわることの心地良さを味わうことができた	A	A		子ども同士の思いの橋渡しをし、自分とは違う思いもあることを知らせる。自分で考え、自分の言葉で話せるよう「こんな時はどうすればよいか」を具体的に伝えたり、意図的に見守ったりする
		身近な自然物や素材を使った遊びや、生き物を通して感動体験を十分に味わっている	身近な自然を生かし、遊びを通していろいろな物や素材に出会える機会を作ったり、いつでも自由に手に取り遊べるものを用意したりすることで、自分なりに興味を持って遊びに取り入れ楽しむ姿が見られるようになった。特に、園内にいる身近な生き物の飼育を通して、感動体験を十分に味わうことに繋がっている	A	A		園周辺の自然について保育者が知る取り組みを行う。季節や子どもの興味関心に合わせてどのように提供するか、遊びに取り入れるか、教材研究を行い、環境構成を行う

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	各年齢の発達をおさえ、子どもの成長や興味関心から経験させたいことを明確にした保育が行われている	子どもの発達や興味をおさえ、少人数だからこそできることを考えた保育計画の作成・実践を行うことで、子ども一人一人のペースで生活や遊びを進める姿につながっている	B	A	・自身も学校用務員として働いている。安全点検について「学校用務員と連携して」とあるが、具体的に知りたい。自身のところは職員が点検をし、そのあと用務員が再度チェックをして、修繕等の判断を行っている。日々気が付くこともあるので毎日見回り、改めて回るという機会を設けることも必要だと思う ・災害時の避難については、早めに判断し避難することが一番安全。危険と判断したら、すぐに北小に連絡をし避難をした方が良い ・こども園と小学校の交流は、Win-Winの関係。園側にとって良いこともあるが、学校側にとっても、人と触れ合うことで、世の中にはいろいろな人がいるのだという学びの、とても良い機会である ・学習のテーマとしてのマップ作り（6年生）や、遊ぶもの作り（1・2年生）を行った。遊ぶものは、園児に通用しなかったが、それこそが勉強で「次はどうすればいいか？」と考える場となった ・来年はコミュニティースクールを行っていく中で、園小中でカリキュラムを混和しながらやっていきましょう。15歳までの流れの中で、こども園としては「ここを大切にしましょう」小学校としては、「自主性をもう少し強調していこう」中学校では「共生を含めてやっていこう」それらが１本になっていれば園小中の接続がスムーズに流れていくと思う ・以前「こどもえんだより」のようなものが地域に配られていて、「こんなことをやっているんだね」と知ることが出来た。「ここが何をやっているのか」を地域の人が知って「自分にもできることがないか？」と考えてくれる人も出てくるかと思う。園の取り組みを地域に発信をしてほしい	子どもの発達や興味関心を抑え、今の子どもの姿に合った保育が行われているか、職員間で振り返りを行い、子ども一人一人を具体的に見取る
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の個人差に配慮し、その子に合った援助の仕方を話し合い「見守る、待つ」姿勢で関わり肯定的に受け止めている	子どもの思いを肯定的に受け止め、大人の存在が大きくなりすぎないよう、見守り・声かけなど意図して関わることにより、子どもが主体的に遊ぶ姿につながり、「こうしたい」という思いを各歳児なりに表出できるようになってきている	B	A		大人が関わりすぎたり、目が行き届きすぎたりする傾向がある。自立に向けて、見守りの時間や距離感を考えて子ども一人一人と関わっていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	行事や園外保育を通し友達と一緒に体験したことが遊びの中に取り入れられ、継続や展開されていくよう環境構成が行われている	他園との関わりを通し、そこでの体験が再現できるよう環境を用意したことで３歳児の遊びが広がり、その様子を見て１歳児が真似をするといった、子どもから伝わる遊びの経験が積み重ねられている	B	B		地域のいろいろな人や物に関わり、子どもが経験したことを、園での遊びにつなげられるようにする。また、他園の公開保育に積極的に参加し、自園の環境構成に学びを活かす
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	保育者が状況に応じた判断で的確な避難ができている	安全管理について由比地区の学校用務員と連携し、話し合いの場を設け、実際に安全点検を実施するなど、３園３校で考える体制のきっかけが作られた。園内での課題は、訓練後の反省やヒヤリハットの分析により改善が行われている	A	B		・新年度、新しい職員体制での園内安全点検を実施する。また災害時（台風）の対応についても周知を図る。 ・３園３校との連携を深めた安全管理を実施していく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	・さくらんぼリズムなど体を十分動かす遊びを取り入れ、達成感や繰り返し挑戦しようとする気持ちが育てられている。 ・感染症対策の意識が継続され子ども自身にも身につけられている	・さくらんぼリズムを通して楽しみながら体を動かすことで、基礎的なリズム感が身についたり、歩行や体の動かし方に安定が見られるなど、運動面でも良い影響が見られている。さらに、子ども一人一人の自信にもつながっている ・手洗いやうがいなど生活に必要なことも自らする姿につながっている	B	A		・さくらんぼリズムを園の特色として、今後も継続する為の正しい基本的知識を職員間で学び合う ・感染症が落ち着き忘れがちな基本的生活習慣について、職員が常に意識を持ち、子ども達に必要性を繰り返し伝えていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	子どもの実態や支援方法を話し合い、園全体で共通の関わり方をしている	担任でも見れていなかった子どもの細かな姿を、他の職員との日常的な会話を通して知り得ることがある。情報共有をしながら、一人一人の援助の仕方・関わり方が丁寧に行われている	B	A		いろいろな視点（担任以外の職員）で見えた子どもの実態を、情報交換しながら適切な援助や関わりができるよう、園全体で共通理解をする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	全職員が各自の役割について、組織で運営していることを理解し、協力体制で取り組んでいる	分掌のかけ持ちが多く、職員の協力体制や一つ一つの進捗状況の確認が必要となる。今年度、取り組み状況をその都度明確にできるよう、見える化したことで、年間で見通しを持って進めることができた	B	B		各自が自分の役割に責任を持ち、担当リーダーが中心となって、進捗状況を確認し、見通しを持って分掌が進められるようにする
6 研　修	(1)研修体制の充実	研修テーマを意識した保育実践が行われ、園内研修を通しての評価が次のクラス運営や子どもの育ちに反映されている	公開保育や日々の保育の実践を通して、具体的な姿を記録し、保育の振り返りを行うことで、次につながる環境を意図的に作ることが意識づけられてきている。子どもの人数が少ない分丁寧な見取りが、子どものことをより考えた保育に繋がっている	B	B		研修テーマの意図を、年度初めに職員全員で共通理解を図り、同じ認識で、保育実践が行われるようにする。
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	遊び出しのきっかけとなる体験や環境を工夫し、子どもの「やってみたい」につなげられている	まわりの豊かな自然を生かしたり、同世代の子ども同士と交流する機会を生かしたりしながら、もっと遊びがおもしろくなる環境を保育者間で話し合い用意することで、子どもの「なんだろう」「私もやる！」という姿が増えた	B	A		保育者も遊びの中に入ることで、子どもの「やりたい」を引き出し、達成するために一緒に考えたり準備したりする。また、子どもの興味関心の移り変わりに合わせて環境を変化させていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの様子や園の取り組みを具体的な方法（写真やスライド等）で家庭に発信し、子育ての共有が図られている	お便りで、日々の子どもの遊びの様子からどんなところが育っているのかを具体的に示したり、登降園時の直接的な会話でその日の様子を言葉で伝えたりすることで、互いに子どもの成長を喜び合うことができた	B	B		保育業務支援システムの利用により、子どもの生活や遊びの様子が伝わりやすい発信の仕方を工夫する。同時に、少人数だからこその直接的な会話も大事にし、子どもの様子を具体的に伝えていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	「ゆいっこ交流会」を通じての３園のつながりや由比北小学校との世代交流を通して、園とは違う環境や集団活動が楽しめるよう連携を図って	近隣園との交流が計画的に行われ、回を重ねる毎に深まり、そこでの経験が子どもの心の成長に大きく影響した。また、今年度は小学校との交流も多く、児童が園児のためにと計画された行事に参加することで小学校がより身近となった	A	A		ゆいっこ交流会の継続と、新たに他園交流の機会を積極的に図り、子どもの豊かな経験につなげていく。小学校との交流も今まで以上に深め、職員間での意見交換の場を計画的に持つ
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	子どもの心が動く感動体験が十分に味わえるよう、地域との直接的な交流が計画的に図られている	地域の祭りや敬老会への参加の機会があり、地域の伝統に触れられた。また、日々の散歩で挨拶を通しての交流が図られた。今年度は、地域の特技を持った方を園に招いての直接的な感動体験の機会を多く持つことができた	A	A		北小6年生作成の「お散歩マップ」の活用により、散歩の距離を伸ばし、地域の方との触れ合いや、地域を知る機会を増やしていく。また、園と地域のつながりを、地域に発信する取り組みを実践していく